

平成29年12月6日
愛媛大学

文京遺跡の解明VI『伊予の青石、赤石』

【 12月13日（水）13：00～ 記者説明会実施 】

このたび、愛媛大学埋蔵文化財調査室は、ミュージアムにて、調査成果速報展「文京遺跡の解明VI 伊予の青石、赤石」を開催します。

城北キャンパスに所在する西日本屈指の大規模集落である文京遺跡では、様々な石材で作られた石器が出土しています。速報展では愛媛県内で産出される石材である「伊予の青石、赤石」に注目し、石器や石材に残された痕跡から石材の流通と製作・消費の実態を明らかにしていきます。
※別紙資料をご参照ください。

つきましては、地域へ広く周知いただきますようお願いいたします。

なお以下のとおり、記者説明会を実施いたしますので、ぜひ、取材くださいますようお願いいたします。

記

展示期間：平成29年12月13日（水）～平成30年2月5日（月）※毎週火曜日は休館

記者説明会：平成29年12月13日（水）13：00～

公開講座：平成29年12月16日（土）13：00～16：00

〈講座名〉「文京遺跡の解明VI 伊予の青石、赤石」

〈講師〉柴田昌児（愛媛大学埋蔵文化財調査室 准教授）

会場：愛媛大学ミュージアム エントランス（愛媛大学城北キャンパス内）

※展示、記者説明会、公開講座ともにこちらの会場になります。

開館時間：午前10時～午後4時30分（入館は午後4時まで）

対象：一般の方

入館料：無料

駐車場：無（公共交通機関をご利用ください）

※ 伊予鉄道市内電車「赤十字病院前」下車、北へ徒歩約5分

※ 報道機関の方で、車で取材に来られる場合は、正門警備員室で会社名等をご記入の上、来客用駐車場を利用してください

※送付資料3枚（本紙を含む）

本件に関する問い合わせ先

埋蔵文化財調査室

准教授 柴田 昌児

TEL：089-927-9127

E-mail：shibata.shoji.yq@ehime-u.ac.jp

文京遺跡の解明Ⅵ 「伊予の青石、赤石」

愛媛大学埋蔵文化財調査室

城北キャンパスに所在する西日本屈指の大規模弥生集落である文京遺跡では、今から約二千年前、その生活を支えるために、様々な石材で作られた石器が使われていました。埋蔵文化財調査室では、大学構内遺跡の発掘調査報告書の刊行に向けた整理作業を進め、中間成果をミュージアムのエントランスホールでスポット展示として公開しています。今回は愛媛県内で産出される石材に注目し、石器や石材に残された痕跡から石材の流通と製作・消費の実態を明らかにしていきます。

「伊予の青石」で作られた磨製石器

穂摘具である石庖丁は、緑色片岩を研磨した磨製石器として作られています。

石器石材である緑色片岩は、変成岩の一つである結晶片岩の一種です。四国山地には中央構造線に沿って、東西に延びる三波川変成帯があり、結晶片岩が基盤岩を形成しています。愛媛県域の三波川変成帯からは良質の緑色片岩が産出されることから「伊予の青石」と呼ばれていました。松山平野では南部（現在の砥部町）の砥部川と御坂川の合流地点（文京遺跡から約 8 km）で、三波川変成帯が開析されて流れ込んだ緑色片岩の転石を採取することができ、石材採取地の有力候補地となっています。

文京遺跡では大型竪穴建物 1 棟と中・小型竪穴建物で構成される住居群が、複数のまとまりをつくっています。各住居群からは緑色片岩の転石や粗割素材が出土しており、加工しやすいサイズのものを選択して持ち込んでいることがわかります。さらに形を整えるための剥離調整を施したものや紐孔を穿つ途中の未成品、そして石庖丁を研磨した砥石などが出土しています。このことから、文京遺跡の弥生人たちは、石材の採取地から転石あるいは粗割素材を入手し、各住居群で磨製石庖丁を製作していたと考えられます。



伊予の青石で作られた磨製石庖丁



穂摘み具として使われた磨製石庖丁

「伊予の赤石」で作られた打製石器

赤色珪質岩製の打製石鎌や刃器（スクレイパー）は、打撃と押圧による剥離を繰り返すことによって作られた打製石器です。

石器石材である赤色珪質岩は、深紅に近い赤色を呈した堆積岩（頁岩・チャートを含む）で、愛媛県南部の大洲市と内子町にまたがる標高 654m の神南山周辺（文京遺跡から約 40 km）で露頭していることが知られています。

文京遺跡では各住居群から石鏃や刃器などの製品をはじめ、剥片や未成品が出土しています。特に20次調査で見つかった竪穴建物 SC-35 では、打製石器の未成品と製作段階で生じた剥片や碎片、細部調整で生じた直径2mmほどの微小石片がまとまって出土し、作業台として使われた花崗岩製台石も見つかっています（ミュージアムの文京遺跡コーナーを参照）。出土した石器や未成品、剥片の観察から、両極打法などによって得られた剥片を利用し、押圧剥離によって刃部を作り出していたことがわかりました。SC-35 では打製石器をはじめ、作りやすい大きさに調整・加工された素材が作られていたと考えられています。

打製石器石材の入手方法は現時点で特定は難しいものの二つの可能性が考えられます。一つは産出地に赴き、自ら入手する方法、もう一つは持ち込まれた交易品を入手する方法です。いずれにしても産出地の弥生社会との交流が基盤となっていました。



両極打法

※台石の上に赤色珪質岩を置き、敲き石で打ち割る方法。割れた剥片から打製石器が作られる。



押圧剥離技法

※鹿角などの先端を石器の縁に押し付けて圧力を加え、剥片を押し剥ぐ方法。この技法から打製石器の刃部が作られる。



伊予の赤石で作られた打製石鏃

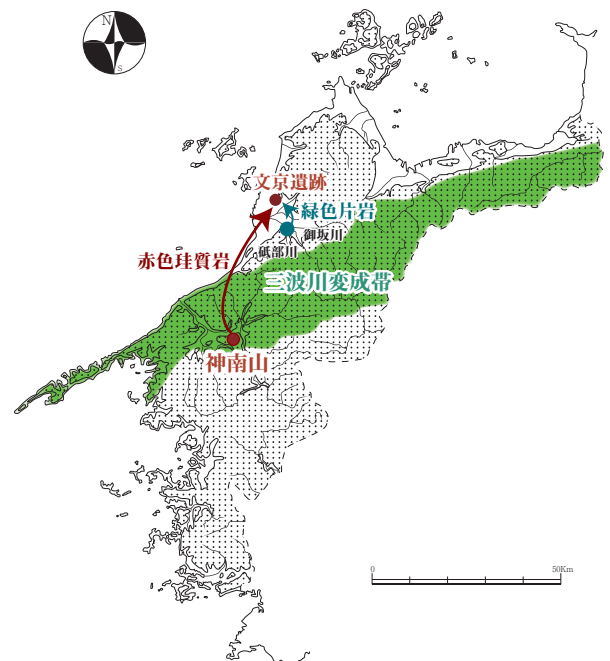
文京遺跡における流通・製作・消費の実態

「伊予の青石」

磨製石庖丁の石材である緑色片岩の石材採取地は、文京遺跡の弥生人たちが日帰りで行動ができる範囲である10km圏内の近接地にあり、比較的容易に必要な量を入手することができる場所にありました。その石材の獲得から磨製石庖丁の製作、穂摘み具としての使用は、個別の経営単位である住居群ごとで行っていました。

「伊予の赤石」

一方、打製石器の素材である赤色珪質岩は、最短でも40kmを超える遠隔地を産地としており、その入手方法や入手量も限りがあったと考えられます。入手した素材剥片は集落単位で管理され、集落の一面で集中的に打製石器と調整・加工された石器素材が製作されたと考えられ、それが各住居群に供給されました。住居群に住む弥生人たちは、製品あるいは加工された石器素材を入手し、製品を仕上げ、使用しました。



文京遺跡と青石・赤石の産地